福祉国家の国際比較

Comparative Study of Welfase States

埋 橋 孝 文
Takafumi UZUHASHI

福祉国家の国際比較研究は80年代後半から重要な著作が出版され、国際的に大きな関心をもたれた分野である。90年代後半に入り、日本の位置を確立する研究がおこなわれるようになった。私の当研究組織もこの延長線上にあった。

研究成果の中で明らかにした点は以下の通りである。

1．従来のワークフェア体制が「失われた90年代の10年」を経過する中でほころびを見せてきていること。このことはアメリカ、イギリスなど多くの先進国でワークフェアが前進しているのとの大きな相違点である。日本でうまく機能しなくなった主たる原因は、雇用情勢の悪化、企業福祉の後退のためである。

2．上の環境変化にあって社会保障制度の対応は適切であったのか、また、今後の政策方向はどうあるべきか、という問題を取り上げた。結論的にいえば、ミーンズ・テスト（所得制限）をともなう選別主義的制度（生活保護がその代表）の「拡充」が必要であるということだ。従来のワークフェア＝中流階級の福祉国家の基盤が揺らいでいる現在、下層－底辺層に手厚い制度＝社会的セーフティネットの拡充が緊急の課題となっている。

今回の研究では、具体的政策提言に先立って、かかる政策方向の基本の確定に努めた。

＜研究発表＞

・埋橋孝文：「失われた10年」と日本モデルの変容．大阪市政調査会『市政研究』No.132，2001.7
・埋橋孝文：福祉国家戦略と社会保障制度の再設計－論点の整理を兼ねて－．『福祉国家の射程』（社会政策学会誌第6号）ミネルヴァ書房，2001.10